



ぴっぴだより

No. 4 2019. 7. 26

ぴっぴの監事の公認会計士ゆばあきらです。ぴっぴだよりには、2回目の登場です。今回は、私と子どもたちとの関りについて書かせていただきます。

私は、高校の頃、東京の品川区に住んでいました。高校は都立日比谷高校です。私が通うようになる数年前に学校群制度が導入され、かつて名門校だった日比谷高校の凋落が始まっていました。それでも過去の雰囲気はまだ残っていて、千葉県あたりから越境入学している生徒もかなりいました。

私にとっての高校生活は、中学時代に両親が離婚し、精神的にも経済的にも厳しい時期でしたので、あまり楽しんだ記憶がありません。勉強も部活も遊びも、すべてが中途半端でした。

私は、高校を卒業したものの国立大学の受験に失敗し、早稲田大学に入学することになりました。大学に入っても、相変わらず中途半端な気持ちで授業も適当に出て、かと言って遊びにのめりこむ才能もなく、その上好きだった女の子にふられて、毎日曇り空のような心境でした。

将来も雲がかかっている進むべき道も見えません。それにも関わらず、自分に自信がなく、道を切り開いていく気力がありません。

さて、日比谷の同級生の一人に、今はカメラマンとして活躍しているS君がいました。彼は高校時代オーケストラに所属しており、クラリネットを吹いていました。あまり親しいわけではなく、クラスの中で会話した記憶は多くはありませんが、放課後などにたまたま吹いているクラリネットのすばらしい音色は覚えています。

ある日、大学のキャンパスを歩いていると、S君が声をかけてきました。彼は高校卒業後、東京教育大学（現筑波大学）に入学し、お茶の水女子大学の学生と一緒に組織する児童文化研究会というサークルに所属していました。当時、東京教育大学の文京区のキャンパスは廃止されて筑波に移転することになっていたため、早稲田に男子学生を勧誘に来ていたのでした。

「一度遊びに来て」と声を掛けられた私は、優柔不断な性格なため、「行くよ。」と答えてしまいました。

それから数週間後、私は教育大の部室に彼を訪ね、彼から、そのサークルが、子どもたちと遊ぶ「こども会パート」、人形劇を制作・上演する「人形劇パート」、子どもたちに読み聞かせする「読書パート」に三つのパートからなっていることを聞きます。

「どのパートがいい？」と聞かれ、活動が続けるつもりもないのに、またしても優柔不断に「じゃあ、こども会」と答えてしまい、その週の土曜日からこども会の活動に参加す

ることになりました。
た。

こども会は、子どもたちが通う小学校に応じて、白山班、千石班、大塚班の3つの班に分かれていました。

私は、男子学生の少なかつた白山班に入れられました。

ここから私の人生が変わります。

子どもたちは、私をすぐに仲間として認め、遊んでくれました。はじめて参加したこども会で、子どもたちと体を動かして思い切り遊びました。子どもたちは、私に来週も来てほしいといい、私も必ず行くと約束しました。思えば、私が人格的に優れていたから仲間に入れてもらったというわけではなく、学生たちが過去子どもたちと築いた豊かな関係性があり、その中に私も入れてもらったのです。

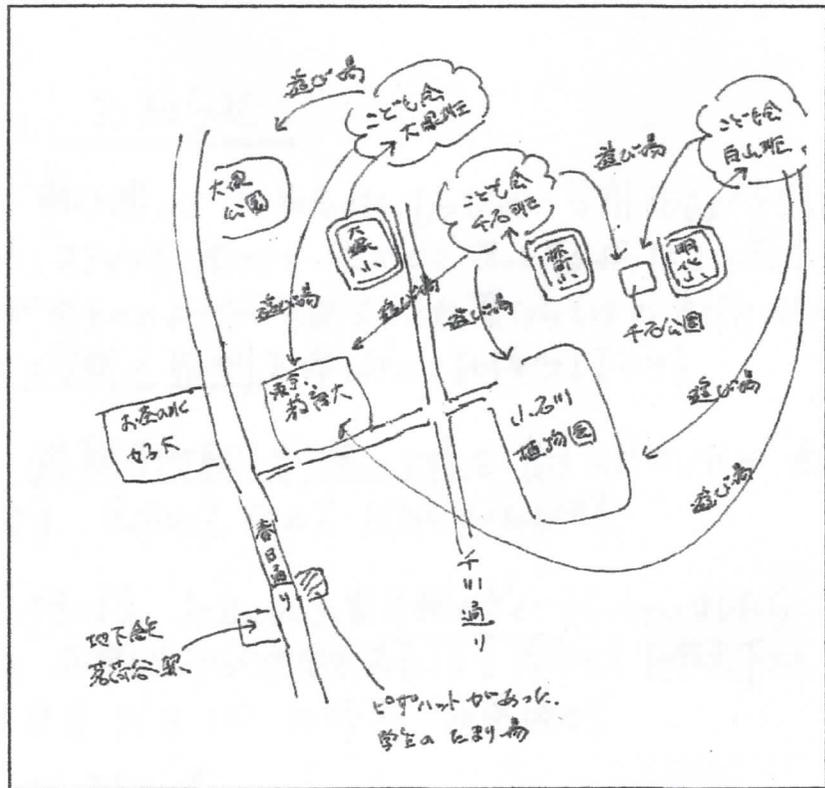
大人になりかけの私は、自分に自信が持てず、悶々とした日々を送っていましたが、遊びを通じて子どもたちが仲間と認めてくれたことで、漸く自信が持てるようになりました。徐々にこども会の学生たちとの関係もでき、私にとってこども会は、私を無条件に受け入れてくれる大切なコミュニティになりました。

私はこのコミュニティに所属したことが自信となり、その後公認会計士試験を受ける気力も生まれました。

人間には、温かく受け入れてくれるコミュニティが必要です。たとえ温かな家庭で育ったとしても、健全な精神で生きていくためには、成長する過程で家族以外のコミュニティに入って認められる体験が必要ではないでしょうか。

ぴっぴは、いつでもあたたかなコミュニティです。ぴっぴは、健全な精神が育つふかふかの土壌なのです。ぴっぴの子どもたちは、成長してもきっと心豊かに暮らしていけると確信しています。

ぴっぴは、いつでもあたたかなコミュニティです。ぴっぴは、健全な精神が育つふかふかの土壌なのです。ぴっぴの子どもたちは、成長してもきっと心豊かに暮らしていけると確信しています。



ゆいあきら

自然と友だち ～ 7月 ミミズ～

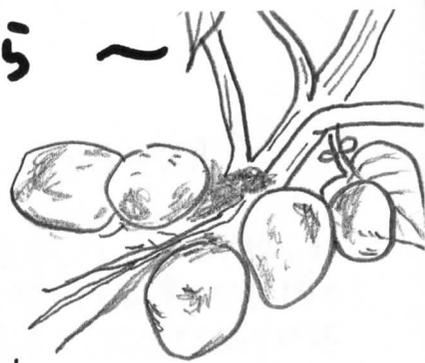
雨の日が多かった今月は、ミミズと遊ぶ子どもたちがよく見られました。「ミミズ探ししよう！」湿った所を好むことを分かっている、水たまりや丸太の下を探す野花ちゃんや算人君。丸太が横になって転げており、探した後の痕跡が残っていることがよくありました。「ミミズいるー！」と周りの大人に一人ずつ知らせる奏空君。にほちゃんにも教えてあげ、2人でチョンチョン…と触って反応を確かめていました。葉っぱや枝を組み合わせて作った“ミミズのお家”も。咲斗君が、「ミミズさん、良い感じ、って思っているかな？」とミミズの気持ちを考えていました。夏樹君は、ミミズを集めながらも、「小さいのはかわいそうだから取らない。」と自ら選別。つかまったミミズが必死で逃げようとするのを「いけいけ！」と応援したり、とび跳ねるミミズの動きに合わせてジャンプする玄太君。夏樹君が土に返したミミズをもう1度たらいに入れて、「ミミズ屋さんです。」と信敬君。紅ちゃんも、ボールにミミズをたくさん集め、「売れると思う。」と意気揚々。

ミミズは、雨が降ると、酸素を求めて地上に出てくるそうです。ミミズのごはんは、腐葉土で、体をよく見ると、食べた土が透けて見えます。地面から、おしりを出してファンをし、草や木を育ててくれます。ぴっぴの土は、とても栄養があるように見えるのですが、ミミズのおかげかも知れません。ミミズをじっくり見ると、マフラーみたいなものをしています。大人になると、この『環帯』という部分があられ繁殖ができるそうです。また、体節ごとに、細かい毛が生えています。これによって、進むことができます。こすると分かるようなので、ぜひ試してみてください。

モグラや鳥など、様々な生き物の重要な食物となり、生態系を支えているミミズたち。見た目が気持ち悪いと嫌われがちですが、ちょっとミミズのくらしを知ることによって、また違った目で見てもらえたら嬉しいです。

：真理子

田んぼと畑から～



「みてみてー」
「大きいのあったー！」
「こんなにとれたよ～」
種いもが「べちゃべちゃやだー」
「ごろごろしたよ」一列に並べて嬉しそうな顔。
袋いっほいに入れて「おっもー！」

思い思いに、たくさんじゃがいも掘りました！

朝おうちの方の車から降りて、一本道を畑へと向かう子どもたち。
リュックを背負って歩いて行くうしろ姿が見ていていいな～。
幸せだなあ、と感じるような風景があったり。

畝間の草を刈っていると、小花がたくさん付いていて、その場に
いた女の子たちがすかさず花束にしていたり。

じゃがいも掘りのあとに、草ののびた原っぱで、迷路各から始まって、
人数が増えて15人以上でした。かくれんぼが楽しくて、もとめたい
気持ちで終わったり。

可愛いじゃがいもの歌を聴けたり。

水場で何人が軍手洗いしてるのかな、と思ったら「バケツ洗ってるよー」
って言われたり。

帰り道にお馬さんに人参あげたい子は畑で抜いて持って
行ったり。前回より歩くのが早かったり。うしろの子を
気遣う姿がそここで見られたり。。

たくさんじゃがいも、みんなで美味しく楽しみたいですね。

また畑に行きましょう♪ ご協力ありがとうございました、はる